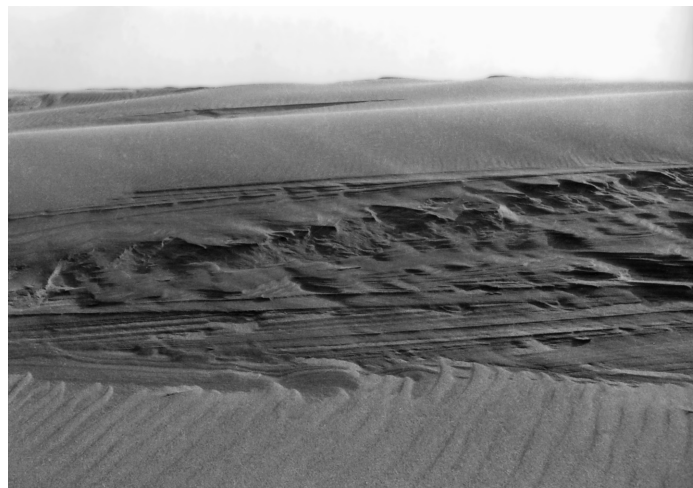


輝いていた時代の

中田島砂丘 なか た じま 静岡県 1965年・2014年

出雲崎漁村 い ず も ざき 新潟県 1964年



中田島砂丘



出雲崎漁村

アルバム写真撮影 中内康博

地理学からの解説 藤田佳久

はじめに

著者・撮影者
中内康博

『中田島砂丘』と『出雲崎漁村』の写真集について

言うまでもなく、写真の撮影は、写した瞬間から過去の映像となる。それは日常の記録であり、また歴史の記録でもある。1965年5月頃に撮影した『中田島砂丘』は、砂丘の素晴らしさを〈砂と風と雨がつくりだす原風景〉と「アルバム1」で述べているように、単なる観光の意識で写したものではない。また砂丘に、私という人間が勝手に水をかけるなどの動作でつくった風景でもない。砂丘に雨が降れば、どのような風景になるか、風が吹けば、どのような風景になるか、それを期待しながら天候と時刻、日を選びながら、「中田島砂丘」の自然が生きているかのような魅力に惹かれて、撮影した記録写真である。

「出雲崎漁村」の場合は、自宅から遠いので、たまたま天候に恵まれて、写すことの出来た記録写真である。しかし、それでも年月が経てば、過去の生活史のひと時を記録したものであれ、地域社会の貴重な映像として、記憶されることは重要であると思える。

ネガ・フィルムの保存について

この写真集のネガ・フィルムの保存は、撮影した翌年の1966年3月に金属製の箱に入れて、湿気が来ないようにセローテープで封をして、4年間の学生生活の他の荷物と共に、私が高知県土佐市の実家に持ち帰ったものである。

それを2012年8月に、愛知大学の合唱団の同窓会が開かれた後で気が付いて、ネガ・フィルムの封を開けるまで、すっかり記憶が薄れていた。はたして無事であるか、胸を痛めつつ箱を開けると、フィルム

の箱は酸の匂いが充満しており、家の中すべての部屋に広がり、家族から大いに叱られた。それでネガ・フィルムは〈離れの家〉の中に、3週間以上、洗濯物を干すようにして、匂いを分散させなければならなかった。

その作業の後で、よくフィルム観察してみると、フィルムのベースに塗られているゼラチンが、凸凹しており、この事実を写真屋さんに説明して、紙焼きする時の引き伸ばし機のレンズの絞りを小さく絞って、ピントを出してくれるように依頼して、やっとのことでL版サイズに焼き付け、それをパソコン印刷機で読み込んで、デジタル化したものである。

この写真集の発行で、印刷物となるが、静岡県浜松市の人々や、新潟県出雲崎町の人々に共有され、記憶に残して下さる事を切に願うものである。

地理学における藤田佳久先生の分析と解説について

「ファイル2」は、愛知大学名誉教授・藤田佳久先生にお頼みして、地理学による貴重な分析の論文を書いて頂いた。それは戦前から戦後にかけて、太平洋側にも日本海側にも、多くの砂丘が形成されていたが、農業も出来ない土地であること、強い風で農地や農家の家が飛砂で被害に遭い、砂丘はちり捨て場にされるなど、敬遠された歴史があった。

また山々から流れる河川により砂が流されて、河口付近では海の波や風の向きなどの自然環境により、砂が海岸に打ち上げられて砂丘が拡大するが、農業などの生活環境では、防砂林が設けられて、砂丘の収縮が繰り返された歴史もあった。

また1960年代の高度経済成長期になって、電力の供給のために、河の上流で多目的ダムが建設されるようになると、砂は下流に流される量が激減する。また河川の砂が都会のコンクリートの建設資源として、大量に消費されるようになると、河口の砂丘の砂は減少して、砂丘は収縮するようになる。

藤田佳久先生の解析では、地震や気象の変化で、海岸が隆起し、また反対に沈下することもある。また人間社会の生活環境としても、自然環境はたえず人間の手で改造を加えられて来たため、砂丘が縮小・変遷させられたことが明らかにされている。またこの『写真集』の風景が、どのような時代を示しているのか、貴重な解説をして下さった。地理学の専門的な分析を学んだ上で、映像を理解すれば、レベルの高い視点で砂丘を見ることが出来るので、大いに感謝しているところである。

私が撮影した年の『中田島砂丘』は、天竜川のダム建設による砂の流れの影響が少ない頃の、日本の砂丘としては、鳥取の砂丘に次ぐ2番目の大きさを保っている時代の砂丘である。それが、わずか60年ほどで、急激に草の生える「砂浜」に変化してしまったことは、誠に残念であるが、これに対して浜松市の人々が、砂丘の復活をめざして市民運動を起こしていることにも感謝する次第である。

また、新潟県の『出雲崎の漁村』の写真は、1964年に撮影してから、それ以後に私は、一度も出雲崎町を視察していない。それで現状はどのようなになっているか、パソコンで出雲崎町の所有する写真を検索してみると、およそ50枚の写真が見つかったが、浜辺の漁家の写真は、1970年以後と思われるカラー写真の中で、1枚だけ浜辺の漁師の家と思われる写真を見つけることが出来た。この写真を見ると、漁家と波

打ち際の距離は、5メートル程であろうか、大変短くなっていて、船は港につながれているようである。

また海岸渚には、堤防をかねたバイパス道路が建設されていて、昔の面影はみつからなかった。しかし、藤田佳久先生が評価して下さったように、浜辺の漁師の家々は、地元の人々にとっても、〈出雲崎漁村の原点〉と言えるかもしれない。それを、ささやかな望みとして地元の人々に、この写真集を届けるものである。

もくじ

はじめに 中内康博

ファイル1	写真の個展をめざして－愛知大学写真研究会OB 中内康博	09
アルバム1	輝いていた時代の中田島砂丘－砂と風と雨がつくる原風景－	11
アルバム2	中田島砂丘の大きさと、その原風景	31
アルバム3	新潟県・出雲崎の漁村－日本海側の漁師の暮らしと海岸風景－	45
アルバム4	豊橋市駅前の喫茶店「三鈴」で開いた写真個展	55
アルバム5	2014年6月11日撮影の中田島砂丘－1965年の撮影から50年後の風景－	61

遠州灘沿いに完成した防潮堤 70

ファイル2 解説－愛知大学名誉教授・理学博士・地理学 藤田佳久 71

I 遠州灘の中田島砂丘をめぐって

1	はじめに	71
2	遠州灘沿岸の砂丘形成の条件	72
	(1) 海岸地形 (2) 風向 (3) 河川からの土砂の流出と河川の争奪	
	(4) 地震による地盤隆起 (5) 地球温暖化と海進	
3	遠州灘沿岸の砂丘と利用	82
	(1) 砂丘分布 (2) 砂丘と市民 (3) 砂丘列の間の歴史	
	(4) 中田島砂丘一帯の砂丘形成の模式図	
4	今日の中田島砂丘	87
	(1) 痩せる砂丘 (2) 出現した巨大な防潮堤	

5	住民たちによる中田島砂丘の保護活動	91
6	中田島砂丘を詠んだ丸山薫の詩（紹介 久野かおる）	92
II 新潟県出雲崎について		
1	はじめに	95
2	出雲崎の町－商家群－	95
3	漁家群	96
4	変わる景観	97
あとがきにかえて 中内康博		99

（著者略歴）

ファイル1

写真の個展をめざして 1965年5月の撮影の思い出

撮影者 中内康博

写真個展をめざして 中田島砂丘の撮影

写真個展をする気持ちになったのは、静岡県浜松市に中田島砂丘が存在することを知ってからである。1965年の5月初め、愛知大学男声合唱団と女声合唱団が合同で中田島砂丘へハイキングに行ったことが契機となった。当時は、鳥取の砂丘の噂を知っていても、これを見たこともない私が、静岡県浜松市の海岸に、綺麗な灰色の砂丘が存在している事に驚き、これを撮影する決心をしてからであった。

しかし、砂丘は刻々と変化するため、そう簡単には撮影できなかった。愛知県豊橋市東小浜町の下宿から、電車、汽車、バスを乗り継いで行っても、観光客が多いため、最初の風景は不規則な足跡だらけで、1枚も取れなかった。2回目に行ってもダメ・・・何回か通って悩むうちに、はっと気が付いたことは、雨が降ってから後で、土曜、日曜をはさまないで、日照りが2日くらい続き、その翌日ほどの夕方5時前後に中田島砂丘へ行くと、砂と風と雨水が流れた砂の記憶が風景に残されていて、足跡に邪魔されない自然の雄大さが撮影出来る、ということであった。

このように撮影時間が選べると分かってからは、中田島砂丘の広い面積の中で、私ひとりだけが砂丘の風景を独占して、大きな感動を胸にしながら撮影したのが、「1965年の中田島砂丘」の写真であった。この時代の中田島砂丘の風景は、雄大な記録的価値のある写真になった。

写真の焼き付け・現像と仕上げについて

写真個展をしたいと思っても、当時の35ミリカメラで、1カ月に1本写すのがやっとの貧乏学生が、生活費を切り詰めて個展の写真を作成するのは容易な事ではなかった。いささか恥ずかしい話だが、郷里から送られて来た米が無くなると、パンの耳を買いに行った。店員のお姉さんから「どんな犬を飼っていますか？」と聞かれたので、「いや、訳あって僕が食べています。」と答えると、幾分パンの耳は厚くなった。

個展の写真は、35ミリネガ・フィルムから全紙大の大きさに引き伸ばし、しなければならない。ところが下宿の広さは4畳半で、暗幕も全紙大の写真を現像する皿も持っていないため、ベニヤ板と木材で皿を作り、ビニールをかけて皿にして、友人たちが寝静まった深夜に、一晩に2枚か3枚ずつ焼き付け・現像して、翌朝には流水にさらして、写真の自然乾燥を行った。言葉で表現するのは単純作業に聞こえるが、普及型の引伸器を操作して、全紙の紙焼きは印画紙の値段が高いので、失敗しないように印画紙の小片を沢山使って、適正露出の時間を探り当てての作業は、緊張の連続であった。また撮影も露出計を持っている訳ではないので、すべてが経験に基づくその時の判断であった。それでも1枚1枚と焼きあがることに、自分なりの満足感を覚えた。